

## 常盤の物語について

八 木 直 子

### はじめに

常盤御前が描かれている作品は、『平治物語』、『義経記』、御伽草子『常盤物語』、幸若舞曲『伏見常盤』、『山中常盤』、『靡常盤』、『常盤問答』がある。この他に、『吾妻鏡』にその名が見える。

物語類<sup>(1)</sup>と幸若舞において、共通で言えるのは、平治の乱(一一五九)後、すなわち、源義朝の亡くなった後の常盤を描いているということである。

また、常盤の物語は、義経伝説の隆盛によって派生した物語と考えるならば、義経伝説の集大成でもある『義経記』になぜ、常盤にまつわる清水信仰話が取り入れられなかったのか、疑問に思われる。それは、『義経記』では、義経と弁慶の主従物語において、清水寺が舞台となっているからである。また、『義経記』の成立(室町前期)より時代は下るが、浄瑠璃『牛王の姫』においても、清水寺が物語の主要な舞台となっている。これらのことから、義経伝説の一部に清水寺及び、清水信仰との何らかの関連があるのではないかと考えられる。その義経伝説を考えていく上で、常盤と清水信仰との関わりについて、調べる必要を感じた。

そこで、本論では、常盤と清水観音信仰に焦点を当て、『平治物語』以外の諸作品とも比較し、その傾向を明らかにすることを目的とする。

まず、常盤の事が書かれているものの中で、最も古いと考えられる『平治物語』の記事から、読みすすめていきたい。『平治物語』における常盤は、義朝死後、三人の子(今若・乙若・牛若)を連れて、平清盛の妾となる所までを物語っている。

『平治物語』の常盤の話については、清水寺周辺で語られていた物語を『平治物語』が取り入れたとされ、『平治物語』とは独立した、清水観音の御利益を語る女性(盲女か)の語り物ではないかと指摘されている<sup>(2)</sup>。

では、『平治物語』の常盤の清水参りの場面について見てみる。

### 『平治物語』九条家旧蔵・学習院大学図書館蔵本

\*中「常葉落ちらるる事」

心のやるかたもなさには立出ぬれど、行く末はいづくとも思ひわかず、足に任せて行くほどに、としごろ心ざしをはこびけるしにや、清水寺へこそ参りたれ。

其夜は、観音の御前に通夜す。二人を左右のかたはらに伏せて、「衣のつまをさせ」おさなきをふところに抱きて、夜もすがら泣かせせしとこしらへける、心の中いふはかりなし。所、の参詣の貴賤、肩をならべ、膝をかさねて並居たり。祈誓の趣、まち／＼なり。或は、ありはてぬ世中なれ共、過がたき身のありさまをいのるもあり。或は、世につかへながら、司位の心になはぬ事をいのるもあり。されども常葉は、「三人の子共が命、たすけさせ給へ」と、いのるより外、又心にかけて申事なし。九のとしより月詣を始めて、十五に成しかば十八日毎に観音經三十三卷よみ奉る事、おこたらず。歩をはこぶ志の浅からざれば、本尊もいかであはれと照させ給はざるべき。「大慈大悲の本誓には、定業の者をも助け、朽ちたる草木も花さき、実なるとこそ承れ。南無千手

千眼観世音菩薩、三人の子共たすけまませ」と、終夜、泣くどき祈り申せば、観音もいかに憐給ふらんとぞ覚えし。(中略)「うれしくは聞こゆれど、此寺は六波羅ちかきあたりなれば、いかにもあしかるべし。今は仏神の御助ならでは、又、たのもしきかたも候はず、観音にも、能、祈申給へよ」とて、卯の時に清水寺を出て、大和大路にあゆみいで、いづくをさすともなけれ共、南へむかひてぞ歩み行。比は二月十日の曙なれば、余寒、猶尽せず、音羽川の流も氷りつつ、(中略)〔伏見にてやつと宿を貸してくれた人が見つかったのも〕偏に清水の観音の御あはれみなりと、行末たのもしくぞ思ひける。

\*下「常葉六波羅に参る事」

常葉、「一日片時も、命のあるこそふしぎなれ。これさながら、清水の観音の御助なり」とたのもしくて、わが身は観音経をよみ、子共には観音の御名をおしへて唱へさせけり。兵衛佐が死罪の事、池殿、やう／＼に申されければ、死罪ゆるされて、流罪にぞ成にける。「是直事にあらず。八幡大菩薩の御はからひなり。」と、信敬、極りなし。

同・金刀比羅本

\*下「常葉落ちらるる事」

(清盛が三人の子供を殺そうとしていることを伝え聞いて)二月九日の夜にいて、少人も引具して清水寺へぞまいりける。佛の御前にて申けるは、「わらは、観音にたのみをかけまいらせ、七歳のとしより月まうでおこたらず。十三のとしより月ごとに一部の法華経をこたらず、十九の歳より月ごとに三十三札の聖容をすりたてまつる。その観音の慈悲利生ふかくおはしますことをうけたまはるに、三十三身の春の花、にはふたもととは数しらず、十九数の秋の月、もりこぬ宿はよもあらじ。観音の慈悲利生なれば、後世までと申とも、何にかなへさえたまはざるべき。いかにいはんや、今生に三人の子共の命を助てわらはにみせさせ給へ。」と通夜くどき申されければ、観音もいかにあはれとおほ

しめしけむ、;(中略)「是は六波羅もちかくあれば、始終かなふべしともおぼえず。大和のかたへゆきて人をたづねてみむ。」とて、常葉泣々出けり。前途ほど遠きおもひ、大和なる宇多のこほりに籠、後会期はるか也。たもとは暁の故郷の涙にしほれつ、、ならばぬ旅にあさたちて、野路も山ちもみえわかず。比は二月十日なり。

\*下「常葉六波羅に参る事」

三人の子どもの命をたすけしは、清水寺の観音の御利生といふ。日本一の美人たりし故也。容は幸の花とはかやうのことをや申べき。

同・古活字本

\*下「頼朝生捕らるる事付たり常葉落ちらるる事」

：あまりに思ひうる方もなきま、に、「年来たのみ奉りたる観音にこそなげき申さぬ。」とて、二月九日の夜に入て、三人のおさなひ人を引具して、清水へこそ参りけれ。(中略)たそがれ時に宿をいで、足に任てたどりゆく心の中こそ哀なれ。佛前に参ても、二人の子供をわきにすへ、只さめ／＼となきゐたり。夜もすがらの祈請にも、「童、九つの歳より月詣を始めて、十五になるまでは、十八日ごとに卅三巻の普門品をよみ奉り、其年より毎月法華経三部、十九のとしより、日ごとに此卅三巻の聖容をうつし奉る。かくのごとき志、大慈大悲の御ちかひにて、てらししろしめすならば、わらはが事はとかくも、たゞ三人の子共のかひなき命を助させ給へ。」とくどきけり。誠に三十三身の春の花、にははぬ袖もあらじかし。十九説法の秋の月、照さぬむねもなかるべければ、さすがに千手千眼も、哀とはみそなはし給ふらんとぞおほえける。(中略)「六波羅ちかき所なれば、しばしもいかゞさぶらはむ。まことに忘給はずは、佛神の御あはれみよりほかは、たのむ方も侍らねば、観音に能祈り申たび給へ。」とて、まだ夜の中に出ければ、(中略)宇多郡を心ざせば、大和大路を尋つ、南をさしてあゆめども、ならばぬ旅の朝立に、露とあらそふ我涙、た

もともすそもしほれけり。

\*下「常葉六波羅に参る事」

(母と子供たちが命拾いしたのも) 常葉は、子どもの命けふにのぶるも、ひとへに観音の御はからひと思ひければ、弥信心をいたして、普門品をよみ奉り、子どもには名号をぞとなへさせける。

『平治物語』の諸本については、代表的なものを三本取り上げた。まず一本目が、古態本とされる、九条家旧蔵・学習院大学図書館蔵本(以下、学習院本)、そして二本目が金刀比羅本、三本目は流布本の古活字本である。いずれの本についても、常盤が登場するのは「常葉落ちらるる事」と「常葉六波羅に参る事」の章段である。『平治物語』の常葉に関する部分の話の筋は、前半が、都落ちで、後半が六波羅への出頭となっている。学習院本も金刀比羅本も話の展開は清水観音の利生を説いている点において同じである。そして三本とも共通で、常葉は幼少時から、清水寺への月参りをし、法華經の読誦を欠かさず、信心深い人物として描かれている。しかし、細部を見てゆくと、違いが見られる。

例えば、学習院本は、常葉が命を取り留めたのは、観音の力によるものとしている。すぐ後に、頼朝が死罪から流罪へと罪が軽減されたのは、八幡大菩薩のからいであるとして述べている。これは、常葉は清水観音により守られ、源氏の大将となる頼朝には、源氏の守護神である八幡大菩薩(石清水八幡宮の祭神)の加護によるという、対比構造がうかがわれる。この趣向は、金刀比羅本と古活字本には、見当たらない。これに対し、金刀比羅本では、三人の子供が命拾いしたのは、清水観音の御利益はもちろんのこと、常葉の美貌によるものであると締め括っている。古活字本では、子供たちが無事であったのも、観音の力によるものとし、常盤の美貌によるとは記していない。

次に、『義経記』について見てみたい。『義経記』で、常盤について触れられているのは、巻第一「常盤都落の事」と「牛若鞍馬入りの事」の二章段である。ここでは、清盛が三人の子供達を捕えて殺すにちがいないという、噂を耳にした常盤が、

大和の国の宇陀郡に逃げてゆく所から始まる。ところが、清盛に召し出され、やはり妾とされてしまう。そして、牛若を鞍馬寺に預けるところまでが記されている。

『平治物語』では、観音の利生によって常葉と子供たちの命が助かったとしているが、『義経記』では、以下のように語っている。

『義経記』巻第一「常盤都落の事」

清盛つねに常盤がもとに文を遣はされけれども、取りてだにも見ず。されど子共を助けんが為に、終に従ひけり。さてこそ、常盤が子共をば所々にて成人させせけり。

子供達を成人させることができたのも、常盤が清盛の命令に従ったからだとしている。『義経記』では、清水寺の利生については一切触れられていない。

次に、御伽草子『常盤物語』(歎喜寺蔵本)において見てみたい。『常盤物語』については、内容の異なる二種類の本が存在する。一つは反町茂雄氏旧蔵の寛永二年写の『常盤物語』である。反町茂雄氏の『常盤物語』では、二つ目は、歎喜寺蔵本の『常盤物語』である。反町茂雄氏旧蔵の寛永二年写の『常盤物語』については、『古浄瑠璃正本集・第一増訂版』に翻刻され、古浄瑠璃に分類されている。その内容は、常盤というより、むしろ義経についての内容がほとんどを占めている。そのため、今回は、歎喜寺蔵本の『常盤物語』を取り上げる。物語は平治元年十二月、源氏の大将義朝が戦に負けるところから始まる。常盤は三人の子供を連れて、大和の方へと落ちていく。途中、伏見のとある庵で爺と婆の世話になり、二月末までそこで過ごした。その頃、清盛は源氏の滅亡を語り、三人の若君を捜したそうとする。まず、常盤の母である「桂の宰相」を捕まえる。母と子供を助ける為に、常盤は清盛の妾となり、伏見の爺と婆に礼をするという内容となっている。清水の観音については、三箇所書かれている。先ず、母桂の宰相は、六条河原で清盛の拷問にあう。桂の宰相は、清盛の脅迫にも負けず、毅然とした態度をとり、このように語る。

## 『常盤物語』(歎喜寺蔵本)

清水をふしおかみ、かねて、たのみをかけし、大じ大ひのくわんせおん、いきれわかれし、ときわに、此よにて、きゑんうすくとも、ふだらくせんにて、いまたび、あわせてたひ給へと、きせひふかくぞ、申さる、

清水の観音菩薩に、もう一度、娘常盤に会いたいと願いをかけるのである。その頃、常盤は自分の身代わりに母が獄門に掛けられているとも知らずにいた。そうしているうちに、伏見の里の奥で、商人から、母と義朝の行方について聞かされることになる。

あけくれは、御母うへの御こと、よしともの御ゆくゑ、きかまほしく、おほしめされ、涙にふししづみて、おはせしに、誠に、きよみづの御ひきあわせと、おほしくて、

通りがかりの商人が、母と義朝の消息を知らせてくれたのも、清水観音の引き合わせによるものだとしている。また、獄門に掛けられていた母と再会する場面では、

母も、ときわも、もろともに、これはゆめかど、はかりにて、まこと、さらに、わきまへす、あきれてこそは、おはしけれ、まことは、うつ、なりければ、二人なから、てをあわせ、きよみづのかたを、ふしおかみ、きせひのしるし、あらたにて、大慈大悲の御願かや、とがをたすくる御ちかひ、あらありかたの御ことやと、たかひに手をとりくみて、うれしなきの、なみたは、せきとめかたき、なみたかな

母と娘の再会が叶ったのも、清水観音のおかげであると、二人は感謝の祈りをす。『常盤物語』(歎喜寺蔵本)では、『平治物語』ほど清水利生譚としての性格が

濃厚ではないものの、清水観音についての記述が見られる。母桂の宰相が、娘との再会を願ひ、叶えられるという話の展開部において、清水観音の利生が、重要な要素を果たしていると思われる。

では、次に幸若舞について見てみる。<sup>3)</sup> 幸若舞曲とは、軍記物語と関係が深い芸能で、語り物という点において軍記物語と共通である。しかも、幸若舞曲は、文字化され、読み物として、現在に伝わっている。このことから、軍記物語を読み解く上での、手がかりとなるのである。現在伝わっている曲目の中で、圧倒的に多いのは源義経を中心とする作品である。<sup>4)</sup>

常盤に関する幸若舞曲と言えば、『伏見常盤』、『靡常盤』、『常盤問答』、『山中常盤』である。幸若舞曲『伏見常盤』と『靡常盤』に関しては、『平治物語』『常葉六波羅に参る事』、御伽草子『常盤物語』(歎喜寺蔵本)に相当する内容である。幸若舞曲『常盤問答』については、常盤に関する曲目ではあるが、素材が異なる為、今回は取り上げない。

幸若舞曲『伏見常盤』では、平治の乱後から、平家の目を逃れ、大和へ落ちてゆく話となっている。御伽草子『常盤物語』同様、落ちていく途中、道に迷い、伏見で過ごすこととなる。

さて、清水観音については、以下の様に記されている。

## 『伏見常盤』

頃はいつぞの比ぞとよ。永暦元年正月十七日の夜の事なり。清水参りと申て、諸人数を知らざりき。上下の道者にうち紛れ、清水に参りつ、左の格子に通夜申、十の蓮花を揉み合せ、八ふんの頭を地に付けて、「抑御山は、田村丸の御建立、大同二年に立られ、山より滝が落れば、水上清き御寺とて、扱こそ、額にも清水寺とは打たれたり。自らが十七より今まで参りの利生には、三人の若どもが行方、守りて賜ひ給へ。南無大悲観世音」と、鰐口ちやうど打ち鳴らし、涙に咽び給へば、実に御本尊も御納受やまし／＼けん、御簾も几帳もぎ、めひて、坊舎も揺ぐかと思へば、いと、殊勝也。

これは、常盤が、三人の子供を連れ、清水へ参詣する場面である。これまでの作品と異なるのは、「永暦元年正月十七日」と年号が記されている点である。『平治物語』諸本や御伽草子『常盤物語』には、具体的な年号はなかった。ちなみに、十八日とは、清水観音の縁日であり、月参りをする人々で大変賑わっていたと思われる。その賑わいに紛れて、清水に詣で、三人の若君の無事を祈願するのである。また、清水寺の縁起についても、これまで見てきた諸本にないほど詳しく述べられている。

次に、幸若舞曲『靡常盤』については、『伏見常盤』の続きと言える内容である。<sup>(5)</sup>この『靡常盤』では、清水というより、むしろ、石清水八幡宮の加護に頼っているように思われる。

最初に、母である尼公が捕まり、清盛と問答する場面において、尼公は以下のように語る。

ときわは生年廿八、孫いま若は七ツ、つき乙若は五ツ、すゑの牛若は二歳也。かれらか年を合すとにこうか年のなかはなり。身つからいく程いきんとてさかりのそんしをうしなふへき。其上源家はこかねにたとへいとに朽ちかははてし也。ときわか子共も三人、いつれも男子にてさふらへは、かれらか中に一人運をひらかぬ事あらし。其上頼朝は天下の御めにかゝり、源氏のしやうのさうありと、くん王も宣旨有し也。(中略) 源氏の大将と天下に此沙汰かくれなし。もしさもあらは、すゑの世にのこりいたらん平しとも、うきめにあはぬ事あらし。まして源家のすゑの代を切からさんとおほす共、いす、川のすゑつぎす、八幡山の月影の光りをやとす事なれば、いかてやみにはまよふへき。

尼公によると、常盤には三人の若君がおり、その中の誰かが運を開かないわけがない。また、頼朝には源氏の將軍としての素質があると言われている。その上、源氏には、八幡山、すなわち石清水八幡宮という光が照らしてしてくれるのだから、闇の世にあっても迷うはずがないと語っている。

また、常盤が宇陀から、六波羅へ行く決心をした場面では、

「こはいかに、浅ましや。わか子を思ふことくに、さこそにこうも身つからを不便とおほしめさるらん。子をはまふけて又みれと親を二度みる事なし。今は力をよはれす。三人の若子共を母うへの御命に取かへはや」とおほしめし、人にとうへき事ならねは、我身一ツにおもひかへ、八幡まふてと事よせて、出させ給ひけるとかや。

と、語っている。常盤が宇陀において世話になった加藤次兵衛に対し、八幡詣と偽って、母を助けに都へ行く事になっている。さて宇陀から都へ上る道行において、次の様に描かれている。

はるかにみれば八幡山、いかてか八幡の捨ははてさせ給はし。(中略)さんぬる正月十八日の雪の日を、まよひくらし伏見山、またきさらきの十八日にめぐりきぬ。清水へまふてたく思へとも心にまかせぬ事なれば、余所なからふしおかみ

常盤が都に入ったのが、観音の縁日である十八日となつてものの、遠くから拜む程度の描かれ方である。しかし、石清水八幡宮に対しては、自分たち源氏をお見捨てになるまいとまで述べている。さらに、清盛の口説きに靡かぬ常盤に対して、清盛の腹心の部下、盛国はこう諭す。

「かやうに御文のしけき事も若君様の御氏神の御はからひとこそ存候へ。御返事の御座あらは、わかきみ様もめてたくわたらせ給ふへし。御けうくむあれ」と申さる、。

この様に清盛が、文を常盤に送るのも、源氏の守護神である八幡宮によるはからいと思つて下さいと盛国は説得を試みる。

以上、『靡常盤』の各場面を見たが、清水については、道行文において触れられ程度であるのに対し、八幡神については、随所でその加護を強調する形で登場す

る。『靡常盤』においては、清水というよりは、むしろ八幡宮に頼っているように思われる。

次に、『山中常盤』について見ていきたい。『山中常盤』では、常盤と名が付く曲目であるが、主題は牛若の事である。さて、冒頭部において、以下のように述べられている。

さても都におはします母の常盤こぜむは。うしわかどのをゆき方しらずうしなはせ給ひ。御なげきは中く申計もなし。せめておもひの余に。やわたへ御参りあつて。一七日参籠あつて。若君の御いのりを申させ給ひ。其よりも、清水にまいらせ給ひ「南無や大慈大悲の観世音ねがはくはわが子の牛若丸がゆくゑをしらせ。給へや。」ときせいふかくそ申さる、。

『山中常盤』では、常盤は牛若の行方が分らないという設定になっている。そのため、清水に牛若の所在を知りたいと願う。八幡宮、清水いずれについても、記されているが、常盤に付随して語られていた清水信仰話を取り上げただけという程度で、話の展開部には、影響を与えるほどの書かれ方はしていない。

## 最 後 に

『平治物語』諸本については、従来の指摘のように清水観音の利生話という形が一貫して見られた。『義経記』では、子供達を無事成長させることができたのは、常盤の犠牲によるものと記している。また、『常盤物語』でも、やはり、清水観音の利生の話が出てくるものの、『平治物語』諸本との違いが見られた。それは、まず、『対照表』からも分かるように、常盤が清水観音を参拝していないということと、参拝はしていないものの、母桂の宰相が清水観音に娘常盤との再会を願う、その願いに応じる形で、母と娘が再会し、清水観音に感謝をしている。つまり、『平治物語』諸本では、清水観音の加護の対象は、常盤と子供達（今若・乙若・牛若）であったのに対し、『常盤物語』では、その対象が母桂の宰相と娘常盤へと変化し

ているのである。これは元来、清水寺は、坂上田村麻呂が妻の出産の無事を祈願して建立された寺であった。だから、安産を願う妊婦や女性の信仰を集めていた。その為、常盤の親や子を思う物語と観音の利生話が結び付いて語られても、聞く者にとって違和感なく受け入れられたと想像することができる。

また、諸作品に見られる、常盤が都落ちしていく日付のずれについては、『平治物語』諸本と田中本『義経記』が二月としているのに対して、十二行木活字本『義経記』及び、幸若舞曲『伏見常盤』、『靡常盤』では、一月としている。『平治物語』のこの記事に関しては、義朝の死が都に知らされたのは、平治二年正月五日なので、約一ヶ月の間、常盤ら母子が都で安全に過ごしていたとは考えにくい。そのため、どうして二月九日という日付が出てきたのか、疑問が残る。なお、『吾妻鏡』には、この時の常盤に関する記述はない。木活字本『義経記』や幸若舞曲では、正月十七日になっていた。これは、義朝の死の知らせが届いた一月五日のことを踏まえても、二月の記述よりは、納得が得られる。さらに、十八日は観音の縁日であることから、木活字本『義経記』や幸若舞曲では、観音の縁日と結び付けて、常盤の話が語られていたと考えられる。

## 今後の課題

最初に述べた通り、本論では義経伝説と清水との関係を探るための一つの段階として、常盤の物語について見てきた。今回取り上げた作品群を見る限りでも、常盤の話は清水信仰との結び付きによって、独自に膨らんでいったことがわかる。先行研究によって指摘されてきたように、清水周辺で語られていた常盤の話は、『平治物語』へ取り入れられ、御伽草子や幸若舞曲の世界では、清水の縁起を語るなど、さらに具体的なものになっている。以上のことから、常盤を語る上で清水が登場するのは、常套句のようなものであったのだと思われる。それは、『山中常盤』では、話の筋には関わり無く、常盤の紹介をする部分で清水詣での事が触れられているからである。

今回は、常盤に関する一連の作品について、清水という視点で、読み進めた。そ

対照表

物語 事柄	平治物語			義経記 田中本	常盤物語	伏見常盤	摩常盤	山中常盤
	学習院本	金刀本	古活字本					
常盤の観音詣	あり	あり	あり	なし	なし(観音に関する記述あり)	あり	なし	あり
日付	(二月九日)	二月九日	二月九日	① 平治二年二月十日		永暦元年正月十七日 (正月十八日)		
観音の利生について	月詣 観音経	月詣 法華経	月詣 普門品 法華経	② (堅牢地神)	具体的な表記なし	清水寺の縁起を語る		
結末	観音の力(八幡宮を引き合いに出す)	観音の力と美貌	観音の力	常盤の犠牲	観音の力			
その他	観音の加護の対象は母(常盤)と子(今若・乙若・今若)	観音の加護の対象は母(常盤)と子(今若・乙若・今若)	観音の加護の対象は母(常盤)と子(今若・乙若・今若)		観音の加護の対象は母(柱の宰相)と娘(常盤)		※八幡詣の話	※清水詣以前に八幡詣

の結果、『平治物語』諸本・御伽草子『常盤物語』は、常盤の都落ちに際して、清水観音の利生を説く話の展開となっていた。また、木活字本『義経記』・幸若舞曲は話の展開に清水利生話が影響してはいないものの、場面設定が観音の縁日になっていることと、清水寺の縁起を語っていることから、『平治物語』よりも、清水について具体的に書かれていることが分った。

しかし、何故、『義経記』がこの常盤の清水信仰話を取り入れなかったのか、などの課題を残すことになった。今後の作業としては、今回、取り上げることで大きかった作品(御伽草子『常盤物語』)をさらに読み進めたい。

注

- (1) 常盤に関する物語として、ここでは『平治物語』・『義経記』・御伽草子『常盤物語』を指している。
- (2) 主な、先行研究としては、笠 栄治氏『平治物語第一類本と第四類本の間』(長崎大学教養部紀要・一〇 昭和四四・一一) 日下 力氏『初期平治物語の一考察』(軍記と語り物・七 昭和四五・四) 鈴木淳一氏『平治物語』常盤説話覚え書——その伝承の問題——(『中世説話の世界』笠間書院 昭和五四) 日下 力氏『平治物語』常盤譚考(国

文学研究 早稲田大学国文学会 一九八三) 山下宏明氏『平治物語』の読み——常盤の物語をめぐる——(文学五二(四) 一九八四・四) 常盤譚の読み——山下宏明氏の『平治物語』の読みに対して——(文学五二(二) 一九八四・一一) がある。

- (3) 幸若舞については、『御伽草子事典』にわかりやすく説明されているので、そこから引用したい。幸若舞曲とは、『室町期に流行した語り物芸能の一種。中世の記録類には「曲舞」、または「舞・舞々」と記されることが多い。曲舞は、平安末期から鎌倉期にかけて流行した白拍子の流を汲む芸能であり、『峯相記』の文保二年(一一三二)、蓑寺大堂建立の法会の芸能の中に「クセ舞」とあるのが記録上の初出とされる。それ以降十七世紀の初頭にかけて、約三〇〇年間にわたって流行するが、その内容は十五世紀を境として、神仏の縁起を語るものから、長編の軍語りへと大きく変貌する。この後者のいわば新風の曲舞を、その担い手の名を借りて、幸若舞、または幸若舞曲と呼ぶ。(中略) 幸若の舞曲が人気を得た理由は、それまでの道の曲舞、すなわち新風の曲舞のレパートリーとたことがあげられよう。(中略) 曲舞が読み物として享受されたことは、多くの絵巻・絵本としても製本されていたことから窺えようし、そのことは、曲舞が読み物として耐え得る内容を持っていたことを示しているよう。」とある。
- (4) 既に幸若舞曲と『義経記』についての論議は多くなされてきている。主なものは、島津久基氏『義経文学と伝説』(一九三五年)、市古貞治氏『中世小説の研究』(一九五五年)、『お伽草子研究』(一九八八年)など。『義経記』と幸若舞曲の前後関係を述べるのは、いずれも成り立ちが未詳であるため、困難である。

(5) 『伏見常盤』の内容は、平治の乱後、清盛は常盤の母を捕らえて、拷問されるが、それにも屈せず、母は常盤の行方について頑なに口を閉ざしたのであった。その頃、大和国宇陀に隠れていた常盤は、母を助けるため、都へ上った。清盛は、評判の美女常盤に会いたくて、何度も文を送った。初めは、夫の敵と警戒していた常盤であったが、母達に説得され、気持ちが変わる。三人の子供を清盛の妻子とするなどの条件を出して、それが受け入れられた後、清盛に靡くのである。

(6) 『吾妻鏡』では、文治二年(一一八六)六月六日に常盤とその娘(義経の妹)とが、捕えられたという記事を載せている。

#### 参考文献

- 新日本古典文学大系『保元物語・平治物語・承久記』岩波書店 一九九二・七  
 日本古典文学大系『保元物語・平治物語』岩波書店 一九六一・五  
 日本の文学 古典編『保元物語・平治物語』ほるぷ出版 一九八六・九  
 新編日本古典文学全集『義経記』小学館 二〇〇〇・一  
 室町時代物語大成 第十 角川書店 一九八二・二  
 『お伽草子事典』徳田和夫編 東京堂出版 二〇〇〇・九  
 新日本古典文学大系『舞の本』岩波書店 一九九四・七  
 幸若舞曲研究 第一卷 三弥井書店 一九七九・二  
 幸若舞曲常盤物の形成(一)(二) 吾郷寅之進 伝承文学研究会 一九七三・四、一一